

愛媛県IPM実践指標モデル（カンキツ）

	管理項目		管理ポイント	点数 (注1)	チェック欄(注2)		
	対象	技術			昨年度 の実施 状況	今年度 の実施 目標	今年度 の実施 状況
病害虫・雑草の発生しにくい環境・樹体の整備	共通	間伐	密植園では間伐、縮伐により園地の通風・採光を良好にし、病害虫が発生しにくい環境を作るとともに、防除作業の効率化を図る。	(1)			
	共通	せん定	樹冠内部の通風・採光を良好にし、病害虫が発生しにくい環境を作るとともに、農薬散布における付着の死角をなくす。せん定くずは園外に搬出するか、細かく粉砕し園内に還元する。	1			
	褐色腐敗病・苗疫病	排水	排水をよくし、冠水しないようにする。	1			
	共通	適正施肥	県施肥基準に基づき適切な肥培管理を行う。有機物を適切に施用し、樹勢・根活性を良好に保ち、病害虫の発生しにくい樹体にする。	1			
			カルシウム資材等を適切に施用し、果実体質を強化して、腐敗果の発生を抑制する。(注3)	(1)			
	病害虫	病害虫の伝染源の除去	病害虫の発生部位(枝、葉、果実、花弁など)および枯れ枝を除去し、園外に搬出する。(年間を通じ随時実施する。)	1			
	害虫	害虫発生源の除去	害虫の発生源となる園内及び周辺の寄主植物は除去する。(注4)	(1)			
	病害	防風対策	風傷やかいよう病の発生を少なくするため、防風対策(防風垣、防風ネット等)を講じる。	(1)			
	雑草	雑草種子の生産抑制	種子で増殖する雑草の発生を少なくするために、結実前に除草を実施する。	1			
	ゴマダラカミキリ	下草の管理	6～9月の間、主幹の地際を除草し、産卵を抑制する。	1			
	果実腐敗(収穫後)	収穫、貯蔵時における果実の適正措置	収穫、選果時及び保管庫内では果実を丁寧に扱い、果実腐敗の発生を最小限に抑える。	1			
	ウイルス・ウィロイド病	健全な苗木の使用	新植及び改植時にはウイルス・ウィロイド検定済み無毒苗木(中晩生カンキツの場合は弱毒ウイルス苗)を植え付ける。(注5)	(1)			

防除要否及びタイミ ングの判断	共通	病虫害発生 予察情報の 確認	病虫害防除所が発表する発生予察情報や農 林水産研究所の発表する農業技術情報等 を入手し、病虫害の発生状況や天候に応じた技 術情報等を確認する。	1			
	共通	病虫害の発 生状況の把 握	定期的に園内を見回り、病虫害の発生状況を 観察及び確認する。(注6)	1			
	共通	萌芽・開 花状況等の生 育状況の把 握	最適散布時期を逸しないように、萌芽状況(特 にそうか病対策)及び開花状況(特に訪花害虫 や灰色かび病対策)を把握する。	1			
	雑草	雑草の発生 状況の把握	果樹園及びその周辺に発生している雑草の草 種と発生量を観察及び確認する。	1			
	ミカンハ ダニ	防除の要否 の判断	早期多発樹で1葉平均雌成虫3匹以上を防除 実施の目安とする。	1			
	ヤノネカ イガラム シ	防除の要否 の判断	幼虫初発30～35日後に薬剤散布する。	1			
	黒点病	降雨量の把 握	農薬散布後の積算降雨量200～250mmを次 回散布の目安にする。要防除積算降雨量に達 しない場合でも残効の切れる散布後1ヶ月を防 除実施の目安とする。(注7)	1			
生 物 的 防 除	害虫	天敵類の確 認	園内に発生する天敵類を把握する。(注8)	1			
	病虫害	選択性農薬 の使用	農薬を散布する場合は天敵に影響の少ない剤 を選択する。(注9)	1			
	イセリヤ カイガラ ムシ、ヤ ノネカイ ガラム シ、ル ビーロウ ムシ、ミ カントゲ コナジラ ミ	導入天敵の 活用	導入天敵が生息していないために当該害虫が 多発する場合は、近隣の天敵発生圃場から導 入する。	(1)			
	ゴマダラ カミキリ	生物農薬の 利用	天敵微生物剤(商品名バイオリスカミキリ)を活 用する。	(1)			

物理的防除	褐色腐敗病	枝吊り・マルチ	下垂枝はできるだけ持ち上げ、果実と地表面との距離を保つ。また、敷ワラやマルチ等で雨水の跳ね上りを防止する。	1			
	ゴマダラカミキリ	成虫の捕殺・幼虫の刺殺	定期的に園内を観察し成虫を捕殺する。また、主幹部を観察し、虫糞が出ている場合は刺殺する。	1			
		産卵防止用資材の設置	ネットや金網などで主幹地際部を覆い、産卵を防止する。	(1)			
	チャノキイロアザミウマ	光反射シートの被覆	白色の光反射シートで被覆する。	1			
	雑草	雑草の発生抑止と刈り取り	ナギナタガヤ等の草生栽培による雑草発生の抑止や、草刈機による除草を実施する。	1			
化学的防除	ミカンハダニ	マシン油乳剤の使用	冬期にマシン油乳剤を使用する。4～6月に発生が認められる場合には、高度精製マシン油乳剤により防除を実施する。	1			
	カイガラムシ類		冬期にマシン油乳剤を使用する。	1			
	農薬の使用全般	適正な散布方法、量の選択	十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1			
		農薬飛散防止対策	農薬散布に当たっては、無風～弱風時の選択、ドリフトレスノズル等の飛散が少ない散布器具の使用等の適切な飛散防止策を講じた上で実施する。	1			
		薬剤抵抗性発達遅延策	農薬を使用する場合には、特定の成分のみを繰り返し使用しない。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されている農薬は使用しない。	1			
その他	雑草	除草剤の選択	除草剤を使用する場合は雑草の発生状況や草種を確認し、適切な剤を選定する。	1			
	土壌浸食対策	土壌の流亡防止対策	のり面の保守、草生栽培などによって土壌流亡の防止に努める。	(1)			
	作業日誌	作業日誌の記録	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
	研修会等への参加	研修会等への参加	研修会、栽培講習会等に参加し、最新の病害虫防除技術等を学ぶ。	1			
合計点数(注10)							
対象IPM計(注11)							
評価結果							

注1 毎年度実施する必要がない項目には()を付した。本項目については、実施した場合に加点し、その他の年度は「－」と記す。

注2 :チェック欄では、未実施の場合は0、農薬未使用等当該管理ポイントが当該農家にとってチェックの対象外であった場合は「－」と記す。

注3 :カルシウム資材を土壌施用する場合は土壌分析の結果をもとに計画的に行う。

注4 :園周辺の雑木林におけるアカメガシワ(クワゴマダラヒトリ)、管理放棄カンキツ及び4、5月の新梢発生期における園内の雑草(カンザワハダニ)などが相当する。

注5 :高接ぎによる品種更新を行う場合もウイルス・ウイロイド検定済みの無毒穂木を使用する。

注6 :小型害虫(ダニ類、カイガラムシ類、アザミウマ類)の発生確認のため、ルーペを持参する。

注7 :降雨量の把握にはポリタンク等を利用した簡易雨量計が有用である。

注8 :年間に発生した主要害虫の天敵種群(カブリダニ、捕食性昆虫、寄生蜂(脱出孔の有無))を把握することで加点する。

注9 :天敵に影響が少ないといわれる農薬でも、天敵群によっては影響を受ける場合がある。また、悪影響があっても残効性が短いため、天敵の活動への影響が少ないものもあるので、農薬の散布時期と特徴を考慮して剤を選定する。

なお、生物農薬の使用は天敵類の保護のみならず、薬剤抵抗性発達の遅延等にも有効であるが、防除効果は施用法や病害虫の発生量等の影響を受けやすいので、剤の特徴を十分把握して施用する。

注10 :毎年度実施する管理ポイントの内、実施した管理ポイントの合計点数を記入し、毎年度実施しない管理ポイントの内、実施した管理ポイントの合計点数は()内に記入する。例 20(3)

注11 :毎年度実施する管理ポイントの内、当該年度の病害虫の発生状況等から対象となる管理ポイントの合計点数を記入し、毎年度実施しない管理ポイントの内、当該年度の病害虫の発生状況等から対象となる管理ポイントの合計点数を()内に記入する。例えば、農薬を使用しない場合の「農薬の使用全般」の管理ポイントの点数は対象にならない。例 20(3)